
糸製歯車 [上]

日淀 四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

糸製歯車「上」

【著者名】

日淀 四季

N 8 8 6 5 R

【あらすじ】

運命のアカイ糸って信じるでしょうか？

それが見えるとしたらどう思いますか？

それが見える少年を中心として、上、できれば中、下で話を作るひとつと思います。

興味のある方はどうぞ

小さな頃から・・・何かおかしなモノを見る。別に触れたって、何したって何もない。何か起これば、もつと真剣に他人に話しただろうが、何も起こらないんじゃ仕方ない。話す方がバカらしい。

それに他の人にも見えてると思った。話さなかつた一因はそれもある。だから話したら、何か変な目で見てくる。最初は悪戯だと。みんなしてそんな冗談言つて、みたいな感じで聞く人は増えていく。一人に聞いて、違うと言えば、二人聞く。一人聞いて、違うと言えば、今度は四人。そうして四人から八人。八人から十六人。数は倍々式に増えていき、自分から離れる人はそれより早く、消えていく。

「ゴメン、そんな小指のアカイ線は見えないよ」

親切な人は、親切に話してくれた。その親切さは温かく感じたか冷たく感じたかは、言うまでもない。普通じやない、と理解したのは周りが気になる小学二年の頃だった。

飛行機雲。青いキャンバスに斜めに一つ。シンプルと言えばシンプルだが、それを、芸術的だと思う人は少ない。そして、自分はその少ない方にに入る。

何だつてシンプルがいい。シンプルは単純。単純の対義語は複雑人生だつて、問題だつて、人間関係だつて、複雑なのに巻き込まれるのは御免だ。

蝉が鳴く季節。場所は屋上で空を見ながら、おにぎりを口に運ぶ。階下では忙しなく、売店で複雑な争奪戦をしているだらう。悲しいかな人生。そんなものに労力は使ってられない。

「……誰かいるのか？」
「……誰もいないよ」
「そうか、気のせいかな？」

わざわざ隅の、給水塔の裏にこむところの、面倒な奴だ。

視界の端に映る少女。頬を膨らませ、子供っぽさが残る高校一年生。誰もいない、と言わされたからいない事にしたのだが、聞かれて返事をするのはいる事を主張している。ホント面倒で疲れる。

「九十九拓十！」
「何でしうか、花茶さん」
「達未さん」

「ハツテ呼んで」

「何用だよ、土手の鼻」

やれやれ、とした感じで余つたおにぎりを持つて移動する。喧しく言葉を発しながら、当然ついて来る。

「ねえ、何で移動するの？」

お前がいるからだよ、とは口に出さず、角をせりと曲がる。すかさず達未も角を曲がるが、視界いっぱいにおにぎりが映り、それに気を取られる。床に落ちる前に掴み、資源の無駄にはしなかった。

「…………あれ？」

おにぎり一つは取れたが、目的の拓十はいない。狐にからかわれた感が胸に充満し、少年の名を叫ぶ事で発散。その少年はと言つと、おにぎりを生贅にして、角を曲がつた後、また素早く角を曲がり、走つて逃げた。

平穏を考えれば、おにぎり一つは軽い。天秤にかければ、平穏の方が遙かに重い。

一先ず、一階にしかない自販機まで行き、一番安い缶コーヒーを選ぶ。悠長にしている暇があるか、と聞かれたら、あまりないが、遠いか近いかは解る。

虚空に焦点を合わせ、他の人には見えない、横断するアカイ線を見る。先程から素早く、右往左往している線は恐らく達未。繫がつた先が全く動かないのは僥倖。対象が異なる階にいないと駄目だが、張り詰めた線は上を捲している。若干反則くさいかくれんぼ。楽しむ訳ではないからいいだろう。

自分、九 拓十の通う高校は、四階プラス屋上、体育館、校庭と敷地が広く、学力は中の上。自宅から徒歩10分、自転車で7分の、めんどくさがりな自分についてつけな学校。

早々と廊下を抜け、体育館へと向かう。そこでは遊びに興じたりする者や、暇を部活に勤しむ者で半分が使われていた。凡そスポーツと無関係な自分に相応しい場所ではない。

汗を流す人の脇を抜け、入口とは違うドアから外へ出る。本校からは見えない、バリバリ死角な場所。対象の人物の線は見えないが、多分大丈夫だろう。

冷たいコンクリの地面。覆い被さる陰。遠くに聴こえる様々な夏の声。暇ではあるが、暇潰しとしてはいい。

横になると地面を伝つて、足音が耳に入る。喧しくはない。耳に障る事はない。日常の喧騒と考えれば、気にする程でもない。

ただ・・・・・

「・・・みいつけた・・・」

自分に降り懸かる喧騒は頂けない。

「タクがここに向かうのが3階から見えちゃった」

すげえ視力。マサイ族か何かか、お前は。

「・・・構うなよ・・・」

「冷たいな、拓十は。そんなんじゃモテないよ」

「いいさ、モテなくて。だから構うな」

時間までは静かに退場して欲しい。自分の世界に入るな。自分を知らなくていい。複雑な達未は苦手だ。

「・・・わかった、構わないから。でも、ここにいる」

水の中で燻る火の様だ。火は消えているのに、水から出すと煙だけが出て。今の自分はそれ。一息に怒鳴り、追い返せばいいのだが、それはしない。煙だけを絶えず吹き出している。

元々他人と関わるのは苦手だ。特異なモノが見える事を話した所為もあり、関わっても関わらなくとも、石を投げられる。
だから、自分から距離を置いたし、向こうも余興にしてもつまらないから、距離を置いた。

しかし、達未は違う。達未にも自分が特異な事は話した。最初は笑っていたが、だんだんと口は下がる。「ああ、こいつもか」と思つたが、心配し真剣に聞くようになつていてる。

その時、何て思ったかは忘れた。でも気に障つたのは確かだ。だから今も自分は達未とは距離を置いている。

「ねえ、拓十。今でも見えるの？あの小指に繋がるアカイ線」「・・・うるせえよ」

「それって俗に言つ、運命のアカイ糸みたいなものでしょ？」

そう、年齢と共に知識が備わり、解る事はたくさんある。俺が見

える小指に繋がるアカイ線も、運命のアカイ糸つて俗称がある事は知った。あつたのは嫌悪だけだ。

父親は易者で、よく占いをし、運命やら必然的な出会いだ、と誇大妄想を口にしている。歯車が噛み合つ、とかも言つていただろうか。だから運命なんて言葉は嫌いだった。こんなモノが見える自分は、消してしまいたい。

「その線、私と拓十に繋がつてるかな？」

そんな事だからここ数年、達末はそう聞いてくる。自分はそんなに鈍感ではないし、ある程度観察していれば、こいつは誰に気があるか、何てのは判る。

でも判るからこそ、こいつとこいつは繋がつていない、だから付き合つにしても直ぐに別れるだろう、と思つてしまつ。

そして今、達末は自分と繋がりがあるかを確かめたい。その度に、自分の小指に絡まる糸がどこに繋がるかを見る。悲しい事が嬉しい事か、それは達末には繋がらない。

「・・・バカな事言つてんなよ、土手つ鼻」

結果が頭を過ぎるから、余計達末とは距離を置きたくなる。

体を起こし、教室へと帰る。それについて来る達末。ホントに面倒だ。俺の事何か放つておいて欲しい。

放課後。特に部活に所属している訳でもない。だから帰りはいつも一人だ。ここに異分子が入るのなら、全力で撒くかするだろう。

しかし、家に帰つても特にする事はない。毎日を押し潰し、ただ生きているだけ。ひょっとしたら悟りでも開いてるのかも知れない。だからといって仏門に下る気はない。

虛空で飛び交うアカイ線。運命のアカイ糸と違うと思いたいから、アカイ線と解釈するのか。そんな事をしても、消える訳でもない。小指を切つたって、それは未来永劫変わることはない。

「…………ただいま」

形だけの挨拶。家には人がいる。いや、易者を嘗む父親だが、その相方はいない。

「おかれり、拓十」

台所で料理を作る父。第一印象は優しい父親つて所だろう。実際その通りだ。優しいし、だが奥手。仕事柄か、悪い結果だと至てもフォローする。でも、その優しさが俺は苦手だ。

母親は中一の時に他界。父は悲しみ、俺も泣いた。母親が死ぬ前までは、ずっと母は父との馴れ初めとか言うのを、俺に聞かせていた。

プロポーズは父が先。いかにも易者らしく、「貴女は私の運命の人です」と言つたらしい。その言葉通り、父と母の間にはアカイ線

があった。

だが、母は死んだ。前兆は線が綻び始め、だんだんと切れ込みがあり、色が黒へと変わつていった。それが何なのかは知らない。當時、特異な事はもう話しておらず、親も忘れていた。

「気にしなくていいだろう」と思つていたが、確かに胸の奥で不吉なものを感じた。

病床で息を引き取る瞬間、線は黒だったのではなく、透明だとう事に気づいた。

そうして、心拍数がないと告げる、無情な機械音が耳を叩く。母の手を握っていた、父の手。その小指からアカイ線は切れて、虚空へと消えていった。

自室に入り、ベッドで横になる。今日、達末があんな事を言つたら、母の死に際を思い出し、自分の小指を見つめてしまつ。

どこかへ繋がる糸。行き先は、突き詰めれば判明。でも、繋がる相手は知りたくない。知つてどうしろといつのだ。考えるだけでもバカラしい。

その苛立ちを発散しようと、力任せに布団を退け、立ち上がる。

消したくて、気にしなくて、見たなくて、でも判らなくて。付き合つて、いつとは思えなくて、ただ毎日が暗く、もやもやする。

だからと書いて、諦め切れる訳がない。

「・・・ちゅっと散歩してくる」

晩御飯は、と聞かれて、曖昧に、すぐ戻る、と答える。

抑圧されない、縛られたくない。こんな線（運命）誰が信じるものか。

自転車に跨がり、最初から、後先を考えず、全力で漕ぐ。息を切らし、でも緩めない。交差点に差し掛かるが、ブレーキはかけない。

これで見えなくはないが、ぽかす事ぐらいはできる。風が進行方向とは逆に感じ、体を押さえ付ける。

顔には強く当たる。鼻は空気の匂いが、耳には風が。それぞれ涙腺を緩ぐする。

他人には見せたくない顔。本当はぽかして、見づらしくしてる訳ではない。

抑圧された現実に泣けない自分を、こうして慰める。泣きたい訳ではない。辛い訳ではない。ただこうでもしないと、やつていけない。

見たくない。でも、この線が切れたらい、自分はどうするのだろう。

いつもの様に、定番におにぎりを手に持ち、屋上へと歩く。人は擦れ違うといふのに、前に立ち塞がる誰か。

雑過ぎる。昨日の生理現象に、やつと区切りをつけたのに、再来させないでほしい。

「タク」

退かない人物に、迂回して屋上に足を運ぶ。面倒だ、どうにかして撒きたい。

「今日は田を切らないから」

卷之三

不快感が口に出る。複雑。静かに、平穏な生を送らせてくれよ。

「ねえ、今日こそ聞かせてよ」

昨日言つた事を忘れたのか。頼むから、また、自転車を走らせたくなるから、何も言うな。

「しゃべんな、何のつもりなんだよ、

ハハ何のこもりなぐか

気づいたら振り向いて、怒鳴っていた。そして、一度溢れた感情を抑える程、自分は器用な奴ではない。

「アカイ線！？そんなの見えても見えなくても関係ねえよ！－結果を言えば消えんのかお前は！？」

何を言おうとしているのだろう。募ったものが、この機会に爆発してしまつ。なら、何故今まで募らせていたのか。

「繋がつてなんかねえよ！…これで満足したなりビツか消えろ…早く…・…・…田障り…・…だから」

声が小さくなり、顔は下に向く。その所為で、達未がどんな表情をしているか判らなかつた。

顔を上げた頃には、達未は背を向けていた。その姿を見て、何か失つた気がした。

「・・・・・何なんだよ・・・面倒過ぎる・・・」

今まで募らせていたのは、やはり、側にいて欲しかつたのだろうか。自分は思つた程、単純な性格ではないし、複雑過ぎる。急に気分は下がるし、起伏が激しい。

「・・・・・あーあ・・・」

手から転げ落ちたおにぎりを拾つ。形が歪になり、少しみつともない。なんか自分みたいだ。

おにぎりを拾う瞬間、視界の端に映る僅かな切れ込み。手が止まり、呼吸は止まり、視界は定まらない。小指にあるアカイ線に。

こつから入つていたのだろつ。いつもまともに、自分のなんて見よつとしなかつたから、判らない。

母親の死に際が過ぎる。頭を振つても払拭されない。告げる事は、单纯明解に一つ。誰かが息を引き取るという事。

気にする事はない。どうせ62億ある内の1だ。ニュースで流れるだけの、過ぎていく命だ。

「・・・また・・・自転車で走らないと・・・・・な」

食欲をなくし、屋上をあとにする。教室には戻らず一階まで下りる。自販機で、一番安い缶コーヒーを買つ、のは止めにして、スポーツドリンクを買つ。

それを手にして、逡巡し、廊下を走る。校舎の外へ飛び出し、自転車に跨がる。

校則違反も甚だしい。学生はまだ、学業に励む時間が残っているといふのに、そんなものを無視をする。

誰かに叱られるのは、もうどうでもいい。でも、死の床に伏せているのは、どうでもよくない。

死んでしまった事は仕方ない。死ぬ手前にいる事を知つてしまつたら・・・訳がわかんない。そんな単純ではないみたいだ。

自転車を30分程走らせ着いた場所は、近場の市立病院。線はここに伸びている。という事は病人らしい。益々母親と重なってしまう。

足を踏み入れ、辺りを見渡す。縦横無尽に線は飛び交い、背景に溶け込み、千切れそうなモノも多数ある。気分が悪くなりそうだ。

名前も知らないし、顔も知らない。とりあえず、病室は不明だし、線を辿つていこう。

自分の右腕を動かし、上下する線を辿る。擦れ違う人は、不思議に思うだろう。見舞いに来た人だと思つてくれればいい。

線はドアの向こうに続いている。3階の端にある一室。部屋に入るのが憚れる。見ず知らずの他人が訪れるなんて、ドン引きは確実。どうしたものか。

「・・・・・」

「お見舞いかな」

心臓がホップして、ステップして、ジャンプは抑えた。ジャンプをすると、とんでもなく素つ頓狂な声を出して、間違いなく。危うく大恥をかく所だった。

「そうか、シナミも喜ぶよ」

「いや・・・その・・・」

「多分寝てるかも知れないけど、そこは勘弁ね」

第一印象、屈託がなく、強引な人。疑いつていう言葉を知らなさそうだ。

病室に入ると、何か変わった訳ではない。しかし、幕の向こうにいる女性と繋がっている線が、若干切れ込みが増えた気がした。

カーテンを開け、ベッドに横になる女性が、飛び切り自分の好みと違っていたり、飛び切り届かない高嶺の花なら、直ぐに帰るつもりだった。

しかし、眠る顔はどこまでも穏やかで、どこにでもいそうな女性だった。いや、年は自分とそれ程変わらない少女だ。

「それじゃ、」ゆづくつ

少女の、科美と呼ばれた彼女の父親らしき人は、花瓶に花を差し、部屋を出てしまった。

急に心細い。父親がいる時に目が覚めたら覚めたで、無関係なのがばれてしまう。でも、いなかつたらいなかつたで、どうすればいいか、狼狽してしまつ。

「・・・・・誰・・・・？」

父親が出ていくのを窺っていたのか、タイミングよく声がかかる。

「・・・えつと・・・」

「この際誰だつていいわ。・・・名前・・・教えてくれる?」

鮮明な声。とても病床についている人だとは思えない。

「・・・九 拓十」

名乗るなら先に名乗れ、なんて事は言わない。一度手間だし、そんな事するのは馬鹿らしい。

「私は・・・市川 いちかわ 科美・・・」

声は鮮やかなままなのに、最後は聞き取れない。口の動きで、よろしく、と言つたのが判つた。

「…………」「めん……なさい……最近……話した事……

・なく……て」

「少し疲れた?」

続く言葉を繋ぎ、科美は首を縦に振る。どうやらひりうつた方が、あまり負担をかけないで済みそうだ。

「…………何の病気?」

「…………」

口を動かす。「文字、らしい。

「ガン……?」

頷く。

「…………あと……」

弱々しく指を三つ立ててゐる。

「……三ヶ月?」

横に振る。

「三・・・週間?」

そのぐらい、と余命を告げられた日から、数えていたのが窺える。

複雑な毎日をおくるているのか、と、何だか寂しく思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8865r/>

糸製歯車 [上]

2011年5月12日10時51分発行